

ルーマニア上院及びポーランド共和国上院の招待による両国公式訪問 並びに各国の政治経済事情等視察参議院副議長一行報告書

団 長	参議院副議長	長 浜 博行
	参議院議員	松 山 政司
	同	斎 藤 嘉隆
	同	谷 合 正明
	同	榛葉賀津也
	同	井 上 哲士
同 行	委員部長	黒 川 和良
	副議長秘書	外 川 裕之
	参事	西木戸一真

一、始めに（派遣の概要）

長浜博行参議院副議長一行は、令和六年九月一日から十二日までの間、ルーマニア上院及びポーランド共和国上院の招待により両国を公式訪問するとともに、スロバキア共和国を訪問した。

これらの国はいずれもウクライナと国境を接しており、政府・議会要人との会談においては、昨年八月に訪問した、ロシアに隣接するバルト諸国（エストニア共和国、ラトビア共和国及びリトアニア共和国）に引き続き、ウクライナ情勢や同国への支援に関する議論に焦点が当てられたほか、経済協力を始め二国間関係の深化や議会間交流の更なる発展に向けて意見交換を行った。

まず、ルーマニアにおいて一行は、チウカ上院議長、チョラク首相とそれぞれ会談を行うとともに、チウカ議長主催夕食会に出席し、クンペアヌ上院副議長、対日議員連盟の会員であるフェケット環境・水利・森林大臣等とも懇談した。今般のルーマニア訪問は、チウカ議長の招待により実現したものであり、参議院代表団の同国公式訪問は二〇〇二年以来、実に二十二年ぶりとなる。会談では、ルーマニア側から、日本のODA支援に対する謝意が示されたほか、日・ルーマニア戦略的パートナーシップに基づき両国の協力関係を更に発展させるとともに、ロシアによるウクライナ侵略により国際情勢が厳しさを増す中、価値観を共有する両国が一層連携を強化していくことで一致した。

次に一行はスロバキアを訪問し、日本との交流に関心を有するケーリ外務委員長と会談するとともに、同委員長主催昼食会に出席し、外務委員会所属議員と懇談した。スロバキアの建国以来、参議院副議長の同国訪問は今回が初めてであり、会談では、スロバキア国会における対日友好議員連盟の創設や議会間交流の活性化のほか、スロバキア政府によるウクライナ避難民への人道支援等について意見交換を行った。

次いで一行は、ポーランド上院の招待により同国を訪問し、グルピンスキ上院

副議長と会談するとともに、セヴェリンスキ上院対日友好議員連盟会長主催夕食会に出席し、二〇二〇年に参議院の招待により訪日したグロツキ前上院議長や多くの対日議員連盟会員と懇談した。会談では、厳しさを増す国際安全保障環境において平和秩序を守り抜くためには、同志国との連携がこれまで以上に重要になるとの認識で一致したほか、ウクライナの復興に向けた日本及びポーランド間の協力の可能性や議員連盟の活動を通じた議会間交流の促進等について意見交換を行った。

さらに一行は、各国の政治経済事情等を把握するため、会談の合間を縫って精力的に現地視察を行った。特にウクライナ関係では、ルーマニアのウクライナ避難民支援センター、スロバキアのUNHCR事務所及びポーランドのUNICEF教育・開発センターを訪問し、それぞれ機関の活動、各国政府との連携や課題等について説明を聴取したほか、各国の日系企業関係者、文化・学術関係者等と懇談した際には、ロシアのウクライナ侵略によるビジネス及び生活への影響等も含め意見交換を行った。加えて、ポーランド滞在中には、駐ウクライナ大使によるオンライン・ブリーフィングにおいて、最新のウクライナ情勢について説明を受けたほか、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所跡地及びワルシャワの無名戦士の墓を訪れ、平和への願いを込めて献花を行った。

なお、以上の活動とは別に、参議院日墺友好議員連盟（本院の公設議員連盟の一つ）の会長を務める松山政司議員は、斎藤嘉隆議員及び榛葉賀津也議員と共にオーストリア共和国を訪問し、シェラク・オーストリア対日友好議員連盟会長等を朝食懇談会に招いた上で、両国の議会間交流等について意見交換を行った後、スロバキア日程から長浜副議長一行に合流した。

以下、一行のルーマニア、スロバキア及びポーランドへの派遣日程と共に各会談・視察等の概要を報告する。

二、日程

九月一日（日）東京発、フランクフルト経由、ブカレスト着

九月二日（月）駐ルーマニア大使による現地情勢ブリーフィング、チウカ・ルーマニア上院議長との会談、議会宮殿視察、チウカ・ルーマニア上院議長主催夕食会

九月三日（火）オボール市場及び革命広場視察、チョラク・ルーマニア首相との会談、ウクライナ避難民支援センター訪問、ブカレスト国際空港アクセス鉄道建設計画（M6プロジェクト）の建設現場視察、在留邦人との夕食懇談会

九月四日（水）ブカレスト発、ウィーン着、陸路にてブラチスラバへ移動、駐スロバキア大使による現地情勢ブリーフィング

九月五日（木）ケーリ・スロバキア国会外務委員長との会談、スロバキア国会議事堂及びブラチスラバ城視察、ケーリ・スロバキア国会外務委員長主催昼

食会、UNHCRスロバキア事務所訪問、在留邦人との夕食懇談会
九月六日（金）フレッシュマーケット視察、陸路にてウィーンへ移動、スロバキア・オーストリア国境視察、ウィーン発、クラクフ着、駐ポーランド大使による現地情勢ブリーフィング（クラクフ関係）、日本美術技術博物館（マンガ館）視察、クラクフ商工会・日系企業関係者との夕食懇談会
九月七日（土）アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所跡地視察及び献花、クラクフ文化・学術関係者との夕食懇談会
九月八日（日）シンドラーの工場博物館視察、旧ユダヤ人地区視察、クラクフ発、ワルシャワ着、邦人ピアニストとの懇談、駐ポーランド大使による現地情勢ブリーフィング（ワルシャワ関係）
九月九日（月）無名戦士の墓にて献花、ワルシャワ・ウクライナ商工会関係者との昼食懇談会、ワルシャワ蜂起博物館視察、ワルシャワ大学訪問、在留邦人との夕食懇談会
九月十日（火）ショパン博物館視察、ポーランド上下両院議事堂視察、グルピンスキ・ポーランド上院副議長との会談、UNICEF教育・開発センター訪問、駐ウクライナ大使による現地情勢ブリーフィング（オンライン）、セヴェリンスキ・ポーランド上院対日友好議員連盟会長主催夕食会
九月十一日（水）ポーランド日本情報工科大学訪問、ワルシャワ発、フランクフルト経由、機中泊
九月十二日（木）東京着

三、ルーマニア

（一）ニコラエ＝ヨネル・チウカ・ルーマニア上院議長との会談

チウカ議長との会談は二日午後、ルーマニア議会宮殿内の上院において行われた。

会談冒頭、チウカ議長は、二年前にチョラク首相と共に安倍晋三元総理の国葬儀に参列し、岸田文雄総理とも会談した旨言及した上で、今般の長浜参議院副議長一行の公式訪問はルーマニアと日本のパートナーシップの強化を表すものであり、非常に光栄に思う旨挨拶した。また、ブカレスト国際空港アクセス鉄道建設計画（M6プロジェクト）に係る日本のODA支援、ルーマニアのOECD加盟に向けた取組への支持や大阪・関西万博への招待に対して謝意が示されたほか、ウクライナ支援に関し、普遍的な価値観を共有するルーマニアと日本の協力関係を更に強化していくことの重要性を強調した。

これに対し長浜副議長は、ルーマニア上院による招待及び様々な配慮に対し感謝の意を伝えた上で、ロシアによるウクライナ侵略を受け、同志国の連携がこれまで以上に重要になる中、戦略的パートナーとなったルーマニアとの協力を一層促進していくことが重要と考える旨応じるとともに、ウクライナ産穀物の輸送を始めルーマニアによるウクライナへの支援に敬意を表した。また、「日・ルーマニ

「ア戦略的パートナーシップ構築に関する共同声明」において掲げられている二国間のインフラ案件推進に言及しつつ、日本の先端技術を駆使して昨年完成したブライラ橋は、ウクライナ・モルドバを含めた地域の連結性向上の観点からも重要な役割を果たすものであり、今後も日本の技術がルーマニアのインフラ整備に貢献する機会があることを期待する旨述べた。さらに、長浜副議長は、ルーマニアの大阪・関西万博参加や、チウカ議長の地元クライオヴァでの国際シェークスピア・フェスティバルにおける日本の劇団・演出家の参加に触れ、国民レベルの交流の促進についても期待を寄せた。

後刻開催されるチウカ議長主催夕食会において引き続き意見交換を行うこととし、会談終了後、一行は、ルーマニア議会職員の案内により、チャウシェスク大統領時代に着工され、体制転換後に完成した壮大な議会宮殿内（国家機関の建築物としては米国のペンタゴン、タイの国会議事堂に次いで世界第三位の大きさを誇る）を視察した。

（二）ニコラエ＝ヨネル・チウカ・ルーマニア上院議長主催夕食会

チウカ議長主催夕食会は二日夜、ルーマニア迎賓館において開催された。

冒頭、チウカ議長の趣味であるトマト等の栽培の話の皮切りに、農業大学の学長でもあるクンペアヌ副議長、環境問題を所管するフェケット環境・水利・森林大臣も交え、二〇二六年に京都で開催予定の農業関連国際会議への同副議長の出席、環境にやさしい農業、食に関する健康志向等について懇談した後、ウクライナ支援や日・ルーマニア関係を始め様々な話題について意見交換を行った。

ウクライナ情勢に関し、チウカ議長から、ロシアによるウクライナ侵略は二〇二二年に始まったものではなく、二〇一四年のクリミア侵攻時から継続しており、イデオロギーの問題として捉えるべきとの見解が示されるとともに、北朝鮮製のミサイルがウクライナに対して使用されるなど、ロシアの攻撃を支援・補完する国がある中で、ロシアを止めるためには民主主義国がウクライナを支援し続けることが不可欠である旨発言があり、日本の貢献に対し謝意が示された。引き続きチウカ議長は、ウクライナの周辺国の役割に関し、地政学的な観点からのルーマニアの重要性に言及しつつも、仮にウクライナが敗れた場合にはロシアは黒海を越えてモルドバを占領し、情勢は更に厳しくなる旨指摘したほか、ルーマニアと日本の軍事・防衛面での協力体制の強化に関し、防衛駐在官の配置等について説明した。

これに対し長浜副議長は、価値観を共有する国との連携を強めながら、この危機的な状況をどう打開し、どうやって戦争を終わらせるのか、また、北朝鮮の話も出たが、力による現状変更を国是とするような国々をどのように理解させていくかが今後の大きな課題であり、極めて忍耐力を要する作業が続く旨述べた。また、両国の大使館における防衛駐在官の配置に関する判断に敬意を表したほか、ルーマニアが欧州で初となるF-16戦闘機訓練センターを開設したことに触れ、同国が地域の安全保障において重要な役割を果たしていることを周辺国に認識させる良い機

会である旨指摘した。谷合議員は、二〇二二年、ウクライナ避難民支援の課題を探るため党の調査団派遣でルーマニア、モルドバ及びポーランドを訪問し、帰国後に調査内容を岸田総理に報告した旨説明するとともに、来月総理が交代した後も日本がウクライナと共にあるという姿勢に変わりはなく、参議院としても「ロシアによるウクライナ侵略を非難する決議」を守っていくことが大事である旨強調した。井上議員は、ブカレスト市内視察中に目にした日本のアニメの浸透ぶりについて言及したほか、チウカ議長が東京以外の日本の都市を訪問したことがないと述べたことに対し、次回訪日の際には是非京都にもお越しいただきたい旨述べたところ、チウカ議長は、クンペアヌ副議長と共に訪問を約束する旨応じた。

以上のほか、中東情勢の悪化に伴うウクライナ支援への影響、米国大統領選挙の結果とイスラエルとの関係など、様々な話題について率直な意見交換を行うことができたことに双方から謝意が述べられ、夕食会は終了した。

（三）イオン・マルチュエル・チョラク・ルーマニア首相との会談

チョラク首相との会談は三日午前、ルーマニア首相府において行われた。

会談冒頭、長浜副議長は、両国の要人往来は活発であり、特に昨年三月にヨハニス大統領が来日し、「日・ルーマニア戦略的パートナーシップ構築に関する共同声明」を発出したことは、両国関係の更なる発展にとって非常に意義深い旨述べるとともに、日本のODA卒業案件であるブカレスト国際空港アクセス鉄道建設計画に関し、最も集客が見込まれる駅が「トウキョウ駅」と名付けられる予定と聞き及んでおり、ルーマニアが、日本に対する思い入れをもって本事業に取り組んでいることを歓迎した。さらに、経済分野においては、本年六月に東京において開催された「第二回日・ルーマニア・イノベーションフォーラム」にマコヴェイ対日友好議員連盟会長も出席されたと聞いているが、同フォーラムに参加した貴国企業と日本企業との間で新たなビジネスの可能性が生まれることを期待する旨述べた。引き続き長浜副議長は、ウクライナに対する悲劇と核の脅しが続いていることに心を痛めている旨述べ、ルーマニアが、今もなお約八万人のウクライナ避難民を受け入れ、就労促進に向けた法改正、医療の無償提供、ウクライナ避難民児童に対するルーマニア人児童と同等の教育支援等を実施していることに敬意を表した。その上で、昨日のチウカ議長との会談でも伝えたとおり、国際安全保障環境が厳しさを増す中、同志国との連携がこれまで以上に重要となっており、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序の維持・強化に向けて、ルーマニアを始め、EU諸国やNATOとの協力を一層強化していくことが重要であるとの見解を示した。

これに対しチョラク首相からは、ルーマニアの二大政党の党首であるチウカ議長と自身（チョラク首相）は、政党としては立場が異なる部分があるものの、ルーマニアのために連立を組んだところであり、様々な問題に対処すべく連携している旨述べた後、日本の支援により進行中のブカレスト国際空港アクセス鉄道建設計画については安倍晋三プロジェクトと呼ばせていただいているが、ルーマニ

アではまだまだ日本企業からの支援が必要である旨の発言があった。また、ウクライナ情勢に関し、ロシアがウクライナ産の農産物の輸出をめぐる合意の履行を停止したことを受け、ルーマニア政府はウクライナ産穀物の代替輸送を担っているほか、ウクライナ避難民児童に対する教育支援を実施しており、これらの支援を継続していく旨述べた。

これに対し長浜副議長は、貴国の国内政治に関し、二つの大きな政党が国の安定のためにすばらしい決断をされたと感じており、本年十二月にはルーマニア大統領選挙も控えているところではあるが、力による現状変更は認めないという価値観を共有する国と協力しながら国際的な危機に対処していかなくてはならない旨述べた。また、日・ルーマニア関係では、インフラ整備のみならず、イノベーションやIT等においても協力できる部分が多いのではないかとの見解を示したところ、チョラク首相からは、ルーマニアでは中国企業へのインフラ投資を禁止するとともに、中国企業のデジタル産業への参入も禁止するなど、中国に対して厳しい姿勢を取っており、経済分野における日本の重要性は更に高まっていることを強調したい旨の発言があった。

（四）ウクライナ支援関係施設訪問を含む現地視察

一行は、三日午後、ウクライナ避難民に対する登録や就労・教育・医療面での支援をワンストップで行うウクライナ避難民支援センターを訪問し、ザパタUNHCR事務所長、リアッティUNICEF事務所長、クラリンバルWHO事務所長、マカヌIOM事務所長等から、各機関の活動の概要、登録の流れと手続の所要時間、ウクライナ避難民の大半を占める女性と子ども（ウクライナ政府は成人男性の国外渡航を禁止している）に対する就労や教育支援、ルーマニア政府が構築した避難民への現金給付システム、ルーマニア人と言語体系が異なる避難民の社会統合に関する課題等について説明を受けたほか、財源の確保が課題となる中、日本の支援に謝意が示されるとともに、今後の支援についても要請がなされた。引き続き一行は、ブカレスト市が運営する支援物資倉庫（衣類、食品、衛生用品等の生活必需品を提供）を視察し、その際、ウクライナで日本語講師をしていた避難民女性からお話を伺った。

さらに一行は、ルーマニア最後のODA案件であり、チウカ議長及びチョラク首相との会談において話題となったブカレスト国際空港アクセス鉄道建設計画の建設現場を視察した。

（五）在留邦人との夕食懇談会

以上の活動のほか、一行は、三日夜、ルーマニアの在留邦人との夕食懇談会を行い、現地の製造業、ビジネスコンサルティング業、商社、日本人学校、ウクライナ支援関係のNGO、旅行代理店等で活躍する方々から現地事情やロシアのウクライナ侵略によるビジネス及び生活への影響等についてお話を伺うとともに、意見交換を行った。

四、スロバキア共和国

(一) マリアーン・ケーリ・スロバキア国会外務委員長との会談

ケーリ委員長との会談は五日午前、スロバキア国会内で行われた。

会談冒頭、ケーリ委員長は、アジアの重要なパートナーとして日本を高く評価しており、地理的に離れているにもかかわらず、両国には多くの共通点がある旨述べ、両国間の議員同士の交流を重要視していることから、本日意見交換を行えることをうれしく思う旨挨拶した。また、日本の安倍元総理及びスロバキアのフィツォ首相へのテロ行為に対し遺憾の意を示すとともに、広島及び長崎の被爆者に対しお見舞いの言葉を述べた後、現在スロバキアにおいて六十七社の日系企業が一万人以上の雇用を生み出していることなどに触れ、スロバキア経済における日本の重要性を強調した。加えて、来年の大阪・関西万博の開催について祝意を表した。

これに対し長浜副議長は、まず、フィツォ首相が職務に復帰できる見込みと伺い安堵しているが、いかなる暴力も決して許されるものではない旨述べた上で、参議院副議長として初となる今回のスロバキア訪問の受入に謝意を示した。また、両国は昨年、日・スロバキア外交関係開設三十周年を迎えたが、政府間のみならず国民を代表する議会間の交流が重要であり、今回の訪問を一つの契機として様々な分野での交流が一層活発化することを期待する旨述べた。さらに、大阪・関西万博や、本日急遽出席がかなわなくなったガシュパル副議長の母校であるコメニウス大学が自身（長浜副議長）の母校・早稲田大学と学術交流関係にあることに触れ、国民レベルの交流を更に促進させるためにも、ケーリ委員長には、スロバキア国会における対日友好議員連盟の創設に向けて尽力いただきたい旨要請した。

引き続き長浜副議長は、スロバキアによるウクライナ避難民への人道支援に敬意を表するとともに、国際社会の対立が深まる今こそ、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序を維持・強化していくことが重要であり、価値観を共有するパートナーであるスロバキアとの連携が重要との認識を示した。

これに対しケーリ委員長は、ロシアによるウクライナ侵略は国際法違反であり、とりわけ小国にとって国際法が遵守されないことは死活問題である旨述べた。また、スロバキアの前政権が実施したウクライナへの膨大な軍事支援について、当時野党の立場から批判した経緯に触れつつ、ウクライナ避難民に対する住居の確保や就労・就学の機会の提供など、注力している人道支援について説明した。一方で、ケーリ委員長から、国際的な危機の解決に際し、判断基準が異なることが非常に問題であるとの指摘もなされた。すなわち、イラクで大量の破壊兵器が発見されたとの情報に基づき米国等が同国を爆撃したものの、当時の国際社会の米国に対する批判は現在のロシアに対するものよりも弱く、また、NATOによるユーゴスラビア爆撃の際も同様であり、ダブルスタンダードが存在することを批判した。同委員長は、ロシアを擁護するわけではないとしつつ、キューバ危機を

引き合いに出し、ロシアに対するNATOの圧力によって緊張が高まっており、国際社会のバランスを保つ意識も必要であるとの見解を示した。引き続き、ヴァラーシェク外務副委員長から、ロシア及びウクライナ問題をめぐり国内でも意見が割れており、議員レベルでも様々な考えがある旨発言があったほか、シュテフンコ外務委員は、グリーントランジション関連の課題を取り上げ、原子力には限界があるとし、地熱エネルギー分野においてスロバキアと日本はより密接に協力し得る旨述べた。

会談終了後、一行は、スロバキア国会職員の案内により、国会議事堂内及び隣接するブラチスラバ城を視察した。

（二）マリアーン・ケーリ・スロバキア国会外務委員長主催昼食会

ケーリ外務委員長主催昼食会は五日、市内レストランにおいて開催され、一行は午前中の会談に引き続き、外務委員会所属議員と懇談した。

懇談の話題は、ウクライナ情勢に始まり、北方領土問題、北朝鮮による拉致問題、日中関係、米国大統領選挙、スロバキア国内における社会問題、地熱発電等の促進を含むエネルギー問題、ケーリ委員長が審判資格を有するサッカーに至るまで幅広く、特に午前中の会談においても言及のあった「ダブルスタンダード」の問題について、ケーリ委員長から改めて発言があった。長浜副議長は、ある問題をどこから見るかによって異なった問題に見えることからダブルスタンダードが生じるが、それを解決していくことが政治家の役割である旨述べたほか、ウクライナ情勢等について質疑応答が行われた。ウクライナ戦争がどのように終結すると思うかとの問いに対し、ケーリ委員長は、ロシアが国際法違反を犯していることを強調した上で、戦争終結のためにはロシア及びウクライナ両国に何らかの妥協が必要であり、また、キプロスのように国連平和維持軍の派遣も必要になるのではないかとの見解を示した。スロバキアによる現在のウクライナ支援に関する質問に対しては、前政権下では、例えばロシア製のS300防空システムやMiG-29戦闘機をウクライナに提供したが、国の倉庫が空になるほどの軍事支援を行ったため、現在は弾薬の生産・調達を民間企業経由で実施するなどしている旨の回答があった。また、双方から、議会間交流を始め様々な分野において両国間の交流が更に活発化することに期待が寄せられ、昼食会は打ち解けた雰囲気の中で終了した。

（三）ウクライナ支援関係施設への訪問

一行は、五日午後、UNHCRスロバキア事務所を訪問し、エフエンディッチ事務所長から、UNHCRのスロバキア政府に対するサポート、とりわけスロバキア政府に代わり行っている避難民への現金給付や、同国へのウクライナ避難民の八割以上を占める女性と子どもに対する職業訓練・カウンセリング、避難民の一時保護と難民認定の区分、予算の削減や国境警察における人員不足等の課題について説明を受けるとともに、質疑応答を行った。

長浜副議長から、先日訪問したルーマニアでは言語習得に苦勞されていたこと

との比較で、スロバキアにおけるウクライナ避難民への言語教育について質問があり、これに対し事務所長から、ルーマニア語と異なり、スロバキア語とウクライナ語は似ており、ウクライナから来た者でも会話の三十～四十％は理解できることから、言語の面では比較的親しみやすい旨の回答があった。また、谷合議員及び榛葉議員からは、UNHCR 議員連盟の役員を務めている旨の自己紹介の後、UNHCR による日本への要望のほか、成人男性の避難民が極めて少ない中での困難・課題について質問があり、同事務所長から、予算関係の要望以外には、ウクライナ避難民の社会統合を進める上で教育支援が最も重要と考えているほか、女性や子どもを守る男性がいなかったため、国境付近での人身売買の問題や、子どもが学校・保育施設に入れない場合には、母親一人で育児を担わなければならないフルタイムでの就労が難しいといった課題がある旨の回答があった。

（四）在留邦人との夕食懇談会

一行は、五日夜、スロバキアの在留邦人との夕食懇談会を行い、自動車部品関連の製造業、自動車販売代理店、日本文化を日本語で教える大学専任教員、現地で活躍するバレリーナといった多彩なメンバーから現地事情についてお話を伺うとともに、意見交換を行った。

五、ポーランド共和国

（一）クラクフにおける視察

一行は、首都ワルシャワ訪問に先立ち、クラクフを訪れ、六日午後に日本美術技術博物館、七日午後にアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所跡地、八日午前にシンドラーの工場博物館及び旧ユダヤ人地区を視察した。

日本美術技術博物館（マンガ館）は、欧州有数の浮世絵収集家であったフェリクス・「マンガ」・ヤジェンスキ氏のコレクションを展示するため、ポーランドの著名な映画監督であるアンジェイ・ワイダ氏が、クリスティナ夫人と共に設立したものであり、ワイダ氏が生前、稲盛財団の京都賞を受賞した際の賞金や、国鉄を含む日本からの支援を基に博物館を立ち上げた経緯等について、同夫人から直接お話を伺った後、館長の案内により館内を視察した。なお、ヤジェンスキ氏の愛称である「マンガ」は北斎漫画に由来し、同博物館は「マンガ館」とも呼ばれている。

また、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所跡地においては、日本人ガイドの案内により、第一収容所（アウシュヴィッツ）にてユダヤ人犠牲者の様々な遺品、収容者の就寝場所・牢獄等、ナチスの秘密警察（ゲシュタポ）の控室を視察したほか、長崎での宣教活動後、他の収容者の身代わりとなりコルベ神父が命を落とした懲罰牢も訪れた。一行は、筆舌に尽くし難い苦難の中で犠牲となった数知れない人々に思いを致し、このような悲劇が二度と繰り返されぬよう平和への願いを込めて献花及び記帳した後、第二収容所（ビルケナウ）を視察した。

クラクフでの視察を終えた一行は、ワルシャワへ移動し、ポーランド議会の要

人等との会談に先立ち、無名戦士の墓において献花を行った。

（二）ラファウ・グルピンスキ・ポーランド上院副議長との会談

グルピンスキ副議長との会談は、十日午前のポーランド上下両院議事堂視察に引き続き、上院内において行われた。

会談冒頭、グルピンスキ副議長は、日本はポーランドにとって非常に重要な戦略的パートナーであり、本日は長浜参議院副議長一行にお会いできることを非常にうれしく思う旨挨拶した。また、日本が様々な形でウクライナ支援を行っていることを評価するとともに、ウクライナの復興に向け、例えば電力産業等の分野においてポーランド及び日本の協力の可能性を模索していきたいとの期待を示したほか、政府間のみならず、議会間の協力が非常に大事な役割を果たす旨強調した。

これを受け長浜副議長は、二〇一七年の郡司彰参議院副議長一行のポーランド公式訪問、二〇二〇年のグロツキ上院議長一行の参議院招待による訪日に言及し、議会間の交流が継続的に行われていることをうれしく思う旨述べるとともに、議員間の協力の重要性は指摘のとおりであり、その意味において今回の我々の訪問を受け入れてくれたポーランド上院に感謝申し上げる旨挨拶した。また、昨日一行が、ワルシャワ蜂起博物館を視察したことに触れつつ、ワルシャワ蜂起から八十周年を迎え、我が国でも「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」と題した展覧会が昨年十一月に広島において、本年八月には札幌でも開催された旨紹介した。

さらに長浜副議長は、国際安全保障環境が厳しさを増す中で平和秩序を守り抜くためには、同志国との連携がこれまで以上に重要であり、我が国の戦略的パートナーであるポーランドとの協力を一層促進していきたい旨述べた。

これに対しグルピンスキ副議長は、ポーランドは来年一月のEU議長国就任に向けて準備を進めているが、ウクライナ情勢等で引き続き難しいかじ取りが必要となることは間違いなく、共通の価値観を持つ日本との協力関係の強化は更に重要なものとなる旨応じたほか、大阪・関西万博での同国のパビリオン建設に触れ、ビジネス・文化面での交流の促進や経済面における相互利益の創出に期待を寄せた。

これに引き続き長浜副議長は、貴国がコペルニクス、キュリー夫人など日本の教科書に出てくるような歴史上の偉人を数多く輩出している旨、また、先日のアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所訪問に触れつつ、長崎での宣教活動の後、他の収容者の身代わりとなったコルベ神父や、長崎での被爆後も戦争被害者のために力を尽くされたゼノン修道士といった、両国のきずなを支えてくれた人々の存在も忘れてはならず、アウシュヴィッツでの記帳の際には「愛と感謝」と書かせていただいた旨述べた。また、今回の滞在中、ワルシャワ大学において、日本語を話せる多くの日本学科学生と直接お話をし、明日はポーランド日本情報工科大学を訪問する予定である旨述べたところ、グルピンスキ副議長から、自分の家族もポーランド日本情報工科大学卒であるとの話があったほか、ポーランド側の

対日友好議員連盟には上下両院で約五十人の議員が加入しており、本日の議員連盟主催夕食会等の場を通じて、今後も両国の議員同士の協力を更に深めていきたい旨応じた。

（三）ミハウ・セヴェリンスキ・ポーランド上院対日友好議員連盟会長主催夕食会

セヴェリンスキ議員連盟会長主催夕食会は十日夜、ワルシャワ郊外のレストランにおいて開催され、過去に参議院の招待により訪日したグロツキ前上院議長を始め、多くの対日議員連盟会員と懇談した。

冒頭、セヴェリンスキ会長から、長浜参議院副議長一行のポーランド訪問を歓迎するとともに、本日皆様をお迎えできたことが今後の両国関係の発展の種となることを祈念する旨の挨拶があり、日本は今なお世界の経済大国としてアジアを始めとする地域の安定化に貢献しており、ポーランドや欧州地域に対する姿勢も評価しているところ、我々議員連盟としては日本のすばらしさを伝えていきたい旨述べた。引き続き、グロツキ前上院議長から、二〇二〇年に山東昭子参議院議長の招待により訪日した際には安倍総理等と会談したほか、ポーランド人シベリア孤児関係で福井県や長崎県も訪問したが、本日このような形で参議院からの代表団をお招きできたことを大変うれしく思う旨の挨拶があった。

長浜副議長は、両議員からの温かい歓迎の言葉に謝意を示した後、ポーランド上院対日友好議員連盟は、昨年十月の総選挙を経て本年三月に新たに発足したものと承知しているが、上院副議長及び科学・高等教育大臣としての対日功績により二〇一八年に旭日重光章を叙勲され、東京大学比較法政研究センター客員教授としての来日経験もある、知日派のセヴェリンスキ会長が引き続き会長職を務められることを心強く感じている旨述べ、両国の議会間交流の更なる発展に向けて引き続き御支援をお願いしたい旨挨拶した。

その後の懇談では、来年開催されるショパン国際ピアノコンクールやワルシャワ滞在中に訪問したショパン博物館の話題に始まり、多くの人口を背景としたポーランドの堅調な経済成長、日系企業の進出状況、ポーランドの地政学的な位置付けとウクライナ支援、二〇一九年の国交樹立百周年の際の秋篠宮皇嗣同妃両殿下のポーランド御訪問、ポーランドにおける盛んな日本語教育等のほか、チェレイ副会長を始め医科大学卒業の議員連盟会員が複数名参加していたこともあり、健康・医療関連についても意見が交わされた。双方は、今後も両国の議員連盟の活動等を通じて議会間交流を促進していくことを確認し、夕食会は終了した。

（四）ウクライナ支援関係施設訪問を含む現地視察

一行は、十日午後、ウクライナからの避難民児童に対する教育支援や心のケアを行うUNICEF教育・開発センターを訪問し、ジヘルマン地域調整官等から、同センターの活動の概要を始め、ポーランドにおけるウクライナ避難民児童への義務教育の実施と就学の状況、障がいをもつ児童への支援、ポーランド語を生活言語として習得することに伴うウクライナ人としてのナショナル・アイデンティ

ィティの確保の問題、長期間にわたり父親と会うことができない子どもへの影響等について説明を受け、質疑応答を行った後、センター内に設けられたアートセラピールーム等を視察した。センター側からは、絵画を描くだけではなく、皆で悩みを話し合える環境づくりが重要であり、避難開始当初は暗い絵ばかりであったが、子ども達は徐々に明るい絵を描くように変化してきた等の説明があった。

最後に一行は、日本から持参したアニメのキャラクター入りの文房具等を同センターの子ども達に寄贈した。

また、一行は、ワルシャワ大学の日本学科を訪問し、同大学図書館内にある茶室「懷庵」においてマフ＝ブライソン裏千家淡交会ワルシャワ寸心協会会長によるお点前を頂戴した後、多くの日本語堪能な卒業生を輩出した日本学科の講師と共に現役ポーランド人学生と懇談した。さらに一行は、ポーランド日本情報工科大学を訪問し、ノヴァツキ学長から、同大学が日本の支援を受け設立された経緯等について説明を受けた後、日本文化学部の学部長、講師及び学生と懇談を行った。

（五）駐ウクライナ大使による現地情勢ブリーフィング（オンライン）

今回の訪問先であるルーマニア、スロバキア及びポーランドにおけるウクライナ支援の状況を理解する上で、ウクライナ自体の現状を把握することが必要との観点から、一行は、十日午後、在ポーランド大使館において、駐ウクライナ大使から最新のウクライナ情勢についてオンラインで説明を聴取し、戦争終結に向けた見通し、同国の国民世論、現地での生活の状況、地雷除去を含む日本の支援、国連の対応等について質疑応答を行った。

（六）在留邦人との懇談会

一行は、ポーランド（クラクフ及びワルシャワ）においても、在留邦人（日系企業関係者、日本語教育専門家、芸術家（音楽家及び画家））との懇談の機会を設け、六日にクラクフ商工会・日系企業関係者との夕食懇談会、七日にクラクフ文化・学術関係者との夕食懇談会、八日にショパンの生誕地であるポーランドで活躍する邦人ピアニストとの懇談、九日にワルシャワ・ウクライナ商工会関係者との昼食懇談会及びワルシャワ在留邦人との夕食懇談会を行い、ポーランドに在住する日本人から見た現地の様々な状況についてお話を伺うとともに、意見交換を行った。

六、終わりに

本年の副議長班一行はウクライナと国境を接する三か国を訪問し、昨年のバルト諸国訪問に続く形でウクライナ問題を始めとする様々な課題について議論を行った。ロシアによるウクライナ侵略が長期化する中で、ウクライナに対する支援の現状や戦争の終結に向けた課題等について議員同士が直接顔を合わせて意見を交わし、平和秩序を守り抜くため、これまで以上に連携を強化していくことを確認したことや、様々な分野で活躍する在留邦人から、ウクライナ侵略によるビジ

ネスや生活への影響等について生の声を聞くことができたことは、今回の派遣の成果の一つであると考える。

ウクライナ情勢以外にも、各国の政治経済事情や二国間関係等について議論が交わされたが、その際には団長である長浜副議長以外の議員からも様々な質問や問題提起がなされた。例えば、松山議員及び谷合議員からは政府与党の立場からの問題意識が投げ掛けられ、また、ルーマニア及びポーランドでは、二年前に谷合議員が団長を務めた公明党ウクライナ避難民支援調査団による成果を深掘りする機会ともなった。今回面会した外国議会要人の中には前職が教員であった方も少なくなく、斎藤議員からは教職経験者としての視点が随所で示された。榛葉議員からは、谷合議員と共に役員を務めるU N H C R 議員連盟の立場からの発言とともに、ホロコースト関係で生還者の友人を持つ者としての思いも述べられた。母親が被爆者で広島育ちの被爆二世である井上議員からは、核兵器廃絶に向けて国際社会が力を合わせる必要性等について多くの見解が述べられた。

国民を代表する各国議員同士の信頼関係は、生身の人間たる政治家同士が議論を重ね、長い年月を経て確立されるものであるが、ウクライナ問題を含む国際情勢とともに、各国との経済・文化・学術交流等の促進についても議論を重ねた今回の訪問は、各国議会との協力・信頼関係の更なる強化に寄与したものと確信する。

そして、前述の議員団の活動に際しては、各国の在外公館を始めとする現地機関から様々な側面支援を受けた。本報告書では特筆しなかったものの、会談の間を活用した各国の街並み、歴史的施設、マーケット等の視察を通じて現地の生活・様子を肌で感じることもできたことや、飛行機の大幅な遅延、危険物発見に伴う空港閉鎖など不測の事態が生じたにもかかわらず所期の目的を遂行できたことも、在外公館等の支援のおかげであることを申し添える。

最後に、ルーマニアのチウカ上院議長及びチョラク首相、スロバキアのケーリ外務委員長、ポーランドのグルピンスキ上院副議長及びセヴェリンスキ上院対日友好議員連盟会長を始め訪問各国の議会・政府関係者の皆様並びに片江駐ルーマニア大使、川上駐スロバキア大使、宮島駐ポーランド大使、水内駐オーストリア大使、松田駐ウクライナ大使を始め関係公館の皆様から頂いた御支援と御協力に改めて御礼を申し上げ、本報告を終える。